

第26回 日本時間生物学会に参加して

浅田 浩利[✉]

豊橋技術科学大学 大学院工学研究科 応用化学・生命工学専攻

2019年10月12日から13日にかけて金沢で開催された第26回日本時間生物学会学術大会に参加しました。その前日には概日時計の理論研究に関する時間生物学トレーニングコースが開催され、私も参加させていただきました。今大会は、台風19号の影響により若干の混乱（特に帰りに）が見られましたが、無事開催されることになりホッとしたことを覚えています。

今大会は私にとって初めての学会参加であり、その雰囲気を全く想像することはできず、満足いくポスター発表ができるか大変不安でした。特にトレーニングコースの前日には緊張のあまりよく眠ることができず、会場に向かう道中ではうたた寝をしていましたが、多勢の参加者で盛況の会場に無事到着し、席もとれ、トレーニングコースが始まりました。私は実証研究を行っているため、理論研究にあまり触れていませんでした。このコースでは蔵本モデルなど基礎からご紹介いただき、知識不足な私にとって理論研究を知る良いきっかけになりました。また、体内時計遺伝子のネガティブフィードバックループのみでは自律的な振動は形成されず、時間遅れが必要であることを知れたことも良い学びとなりました。

次の日、学会初日の最初のシンポジウムから自分とは次元の違う研究成果および発表に感服いたしました。発表後、自身のこれまでを改めて見つめ直していたところ、ランチョンセミナーで配布されるお弁当がなくなってしまいました。豪華なものでしたので、ありつけなかったことを悔しく思いましたが、その後のセミナーに集中したことで空腹は忘れてしまいました。

次のポスター発表の前に行われたデータブリッツでは、「30秒ぴったりで発表を終えると賞品ゲット」とゲームのような形式を取り入れることで賑やかに行われました。残念ながら私は、発表時間を過ぎてしまい賞品を貰うことが出来ませんでした。概日リズムを研究する身であるので、自身の概ね30秒を計る体内時計も鍛えていきたいと思えます。ポスター発表で

は、緊張や知識不足によりしっかりと質問に受け答えすることができず、無力さを認識する場となりましたが、的確なアドバイスをたくさんいただき、研究を発展させる良い機会となりました。その後は、特に出雲先生のシンポジウムが私の研究に関わっており、その中で紹介されたSCNにおけるペースメーカー機能の解釈には非常に感銘を受けました。

マイクロバイオームの研究の第一人者である服部正平先生の特別講演では、マイクロバイオームの多様性が個人間のみならず、国や地域でも観察されること紹介していただきました。ヒトはゲノムだけでなくマイクロバイオームからも成り立っているという概念には心を打たれました。

特別講演後、懇親会に向かう頃には緊張も解けており忘れていた空腹が戻ってきました。その空腹のおかげで、お寿司やデザートといったポピュラーなものから石川で有名なカレーや地酒といった特色あるものまで十分に堪能することができました。

最終日にはポスター発表を終え、生き生きと臨むことができました。

学会二日目の Erik Herzog 先生の特別講演では、哺乳類の脳におけるニューロンとグリア細胞の概日リズムの同期について紹介していただき、その研究の進歩は強く印象に残りました。概日リズムのメカニズムが解明される未来へ着実に向かっていることを実感致しました。

今大会を通して、時間生物学会はシアノバクテリア、ショウジョウバエ、魚類およびマウスといった多様な動物を研究対象としているにとどまらず、ヒトの健康や美容、畜産分野および鉄道輸送など多様な分野での産業応用も進められていることから非常に多様性に富んだ学会であることに感銘を受けました。

今大会では、優秀ポスター賞を得ることはできませんでしたが、次回こそは賞をいただけるよう自己研鑽に努める所存であります。

最後となりましたが、今大会を運営に携わられまし

✉ asada.hirotohi.hi@tut.jp

た先生方、関係者の皆様には心より感謝申し上げます。
次回の日本睡眠学会との合同大会も、日本時間生物学

会が益々発展されることを切に願っております。



トレーニングコースの様子



懇親会にて振る舞われた金沢の地酒



服部正平先生の特別講演の様子



Erik Herzog 先生のご挨拶の様子